

LIBRARY NOW

公共図書館新設館レポート

海外と日本

2019 年春号

クロスカルチャー出版

CROSSCULTURE PUBLISHING COMPANY (CPC)

〒101-0064

東京都千代田区神田猿樂町 2-7-6

☎03-5577-6707 ファクス 03-5577-6708

<http://crosscul.com>

【大和市立図書館】



| | | | |
|----|--|--|----------------|
| 6 | 6階 大和地区の文化拠点 地域交流の拠点として 読書・学習・交流の場として 利用可能 | 読書 学習 交流 読書会 学習会 交流会 読書会 学習会 交流会 | 読書 学習 交流 |
| 5 | 5階 読書・学習の拠点 読書・学習の拠点として 利用可能 | 読書 学習 読書会 学習会 | 読書 学習 |
| 4 | 4階 健康都市図書館 健康に関する本や雑誌が 陳列されている | 健康に関する本や雑誌 健康に関する本や雑誌 健康に関する本や雑誌 | 健康に関する本や雑誌 |
| 3 | 3階 子どものための 読書・学習の拠点 子どものための読書・学習の 拠点として利用可能 | 子どものための読書・学習 子どものための読書・学習 子どものための読書・学習 | 子どものための読書・学習 |
| 2 | 2階 読書・学習の拠点 読書・学習の拠点として 利用可能 | 読書 学習 読書会 学習会 | 読書 学習 |
| 1 | 1階 読書・学習の拠点 読書・学習の拠点として 利用可能 | 読書 学習 読書会 学習会 | 読書 学習 |
| B1 | B1階 読書・学習の拠点 読書・学習の拠点として 利用可能 | 読書 学習 読書会 学習会 | 読書 学習 |



【写真左:大和市立図書館外観 大和市立図書館『図書館雑誌』(Vol.112, No.2 2018年2月号より) 写真右:図書館内部。写真は全て小社編集子=撮影】

2016年11月3日に場所を替えオープンした大和市立図書館。オープンして1年半、ハードとソフトの両面で画期的な試みが奏功したのか、300万人以上の来館者があり今や日本一の図書館に。何しろ今までの図書館のイメージを覆して縛りをなくし、自由に読書できる空間を提供したことがウケたらしい。逆転の発想もこうなるとアッパレというほかない。館内での飲み食いは自由、スタバとローソンも入って、芸術文化ホール、生涯学習センター、キッズが遊べる場所や小さな学び空間などもあり、子どもから大人まで読書しながら楽しめる、それが文化創造拠点 SiRiUS、言わば、リテラシー改革の発信基地だ。心に響く・心が躍る・心をつなぐがキャッチフレーズ。地域の牽引力としての公共図書館の未来形(will)が少しみえた。

さて、入館。趣のあるがっしりとした旧館は何度か訪ねたことがあるが、新館は、周辺が整備されて更に駅に近くなった。外観は何となく“環境に優しい要塞基地”を思わせる”コンテンポラリーな建築物である。1階から6階までコンセプトが明確なレイアウト(1階~3階まではエスカレーターでそれ以上はエレベーター使用。もちろん階段も利用可能)、ブラウン系の落ち着いた棚の色、本や雑誌など大きな数字で分かりやすくジャンル分けして配置、快適に読書できるよう用途に応じた机や椅子の組み合わせ等々斬新な試みがいくつも目についた。5階には本や雑誌などが自由に検索できる端末機と貸出等が簡単にできる端末機が置いてある。スキャナー技術が進化し、その技術の応用が貸出や返却のシステムにもみられる。特に高校生のブチグループや中高年が目立ったが、キッズ連れのファミリーも。中には車椅子で来館した元気な年配者もいた。4階は健康都市図書館と命名された健康に関する本や雑誌が陳列されている。館内には健康をチェックできる器具やエクササイズができる器具まである。大和市は健康都市宣言を謳い、高齢者の健康維持で治療費などをおえる運動を展開中だ。その他に託児所施設も。一日中いても飽きない図書館だ。この図書館の詳細情報はこちらが参考になる。

→https://www.trc.co.jp/topics/event/e_yamato.html



Oodi, Helsinki Central Library

Oodi is Helsinki's new Central Library and a living meeting place in the city centre on the Kansalaistori Square. Oodi is a venue for events, a house of reading and a diverse urban experience. It will provide its users with knowledge, new skills and stories, and will be an easy place to access for learning, story immersion, work and relaxation. Oodi is a library of a new era, a living and functional meeting place open for all.

2018年12月5日（水）、フィンランドのヘルシンキに新しい中央図書館「Oodi（オーティ）」が開館します。フィンランド人の読書への関心は非常に高く、読書はフィンランド人の生活に欠かせないものです。図書館利用率の高い国として知られているフィンランドには737の公立図書館があり、年間190万人もの人々が本を借りています（※）。図書館の充実したサービスと洗練された建築は他国とは一線を画し、観光客にとっては北欧デザインを観賞できる見どころにもなっています。この「Oodi」の完成によってヘルシンキのシンボルとなる新たな名所が誕生しました。

フィンランドは昨年、独立100周年を迎えました。ヘルシンキ中央図書館の建設プロジェクトは、独立100周年のメインプロジェクトとして国に指定され、市民が参画しながら進められてきました。一般公募1,600件以上の候補から選ばれた「Oodi」はフィンランド語で「頌歌（しょうか）」という意味です。「頌歌」は古代ギリシア劇で歌われる神の栄光や人の功績などをたたえる賛歌のことです。フィンランド人が独立100周年を祝福する気持ちや、文化や芸術を愛するフィンランド人への贈り物という意味を込めて名付けられました。

「Oodi」のコンセプトは、人々が交流するリビングルームです。観光に便利なヘルシンキ中央のコンサライストリ広場に位置し、すべての人々にとって開かれた文化の発信地となります。広さ17,000平方メートルの広大な敷地に建てられた図書館はフロアごとに特徴があります。人々が活発に行き交う入口となる1階は、カフェや映画館、展示場、イベントホールなどがあり、2階は仕事や学びのためのフロアとして、ワークショップができる会議室やさまざまなスタジオ、個室、設備の揃った工房などがあります。3階は、本の楽園をイメージしたフロアです。独特な曲線美を描く天井の下に約10万冊の本や資料が保管されています。コーヒーを飲みながら、バルコニーから街の景色を眺めることもできます。

「Oodi」のデザインは、ヘルシンキを拠点にして国際的に活躍するALA・アーキテクツが担当しました。ガラスと鉄の構造と木を用いた印象的な外観は、伝統技術と現代建築を組み合わせられており、フィンランド建築らしく環境にもやさしい建物です。最上階を除いて、建物の外装は全て木材が使用されており、その北欧らしい自然建築は訪れる人々の注目を集めることでしょう。待ち望んでいた新図書館の開館を祝し、開館日の12月5日（水）および独立記念日である12月6日（木）にさまざまなイベントが開催されます。詳細は <https://www.oodihelsinki.fi/en/grand-opening/> をご覧ください。

<ヘルシンキ中央図書館「Oodi」の概要>

- 開館時間：月～金 8時～22時 / 土・日 10時～20時
- 住所：Toölonlahdenkatu 4 00100 Helsinki
- 公式ホームページ： <https://www.oodihelsinki.fi/en>

【ヘルシンキ中央図書館 Oodi】



【写真：建設中のヘルシンキ中央図書館 Oodi 2018年8月22日小社編集部＝撮影】

下記は小社編集子のレポート。

今フィンランドのヘルシンキでは2018年12月5日開館予定で新図書館ヘルシンキ中央図書館 (<http://www.oodihelsinki.fi/en/>) が急ピッチで進められている。公共図書館のシンボルが生まれ変わるのだ。北欧図書館視察団は、特別にその図書館建設の最後の工程を現場に入って見せてもらった。安全防具を装備して見た内部は木製の床や張り巡らした配線があちこちに、まさに仕上げ一歩手前の作業である。なぜこんなことまでして潜入したのか。そのわけは3階にあがってカフェテラスになるデッキにさしかかったときの景観でわかった。360度とまではいかないが、街の歴史的建造物が独り占めできる、まさに圧巻の景色がそこにあつたからに他ならない。先ほど見て歩いた大聖堂・元老院ももちろんのこと、ミュージックホール、フィンランドシアホール、カンピ大聖堂などが見える、色鮮やかな絵葉書でも見ている光景が広がっていた。しかも夏雲がくっきり、ムーミンさんやマリメッコさんに、なぜかボンジュールと言いたくなった。まだ行ったことのないパリの屋根裏からの光景と、あるいはこれまた行ったことのないタリンの中世風の町並みの光景を思い浮かべていた(今はWEBCAMなどで生中継されているのでリアルタイムで見られる)。この新図書館の外観もまた、船体風の曲線が優れたデザイン力を発揮している。まだまだ建設途上だが出来上がりが楽しみである。案内人の現場監督はユーモアを解する朗らかな人それにスラッとした優しそうな図書館人、フィンランド人の心意気に触れた思いだった。さて、新図書館のコンセプトは木の温もりを感じながらいろいろな機能を楽しめる空間(仕事、読書、交流、遊び、カフェ、サウナ併設など)にしたいらしい。



【写真下：現在のヘルシンキ中央図書館 Oodi】

【編集後記】

公共図書館向け新しい切り口の小冊子、「LIBRARY NOW」をお届けします。今回取り上げたヘルシンキ中央図書館(Oodi)では北欧最先端のハートのある図書館建築とデザイン力を魅せつけられた感じです。一方、大和市立図書館の試みも画期的です。2館に共通しているのは利用者への配慮でしょうか。読書する楽しみを共有する公共施設の新しい形の出現です。(K)

○ヘルシンキ中央図書館の記事の一部は、PR TIMES やヘルシンキ中央図書館のWEBPAGE から引用したものです。

LIBRARY NOW
2019年2月28日発行
編集——(有)クロスカルチャー出版
LIBRARY NOW 編集委員会
〒101-0064 東京都千代田区神田猿樂町2-7-6
電話 03-5577-6707 ファクス 03-5577-6708

LIBRARY NOW

公共図書館レポート

映画『ニューヨーク公共図書館エクス・リブリス』

2019 年秋号

クロスカルチャー出版

CROSSCULTURE PUBLISHING COMPANY (CPC)

〒101-0064

東京都千代田区神田猿樂町 2-7-6

☎03-5577-6707 ファクス 03-5577-6708

<http://crosscul.com>



【映画『ニューヨーク公共図書館エクス・リプリス』のパンフレット】

世界的に有名なニューヨーク公共図書館 New York Public Library。三越ではないが二つのライオン像(ライオン像には母体となった Astor アスター図書館と Lenox レノックス図書館に因んだ名称がありまた、恐慌時代に名付けられた patience 忍耐と fortitude 不屈の精神の愛称もある)が出迎えてくれる、あのニューヨークは 5 番街 42 丁目にある威厳のある図書館。その名前の経緯は何度も訪ねたり調べたりして筆者なりに分かっていたつもりでいたが、今回ドキュメンタリー映画を観てその名前をしかと認識した次第。氷解したのだ。名称は public だが中身は private なのだ。それは鉄鋼などで財をなしたカーネギーたちが私財を投じてできた世界屈指の私立図書館だからである。カーネギーは教育、文化や福祉にも力を入れた慈善家としても有名だ(これに匹敵する人が日本では倉敷の実業家・慈善家大原孫三郎か)。筆者が最初に訪ねたのは 1980 年代後半だ。プライベート旅行だったが、当時勤めていた会社の商品を閲覧室のコンピューターを使って検索、その会社の商品の何点かが出てきて興奮したことを昨日のように鮮やかに覚えている。また、マップコレクション室や 2 階(?) にあるチャールズ・ディケンズの展示品等を観て回った。そのあとニューヨーク旅行では時々訪ねている。ニューヨーク公共図書館の建物のまわりには様々な人間模様が見て取れて、これまた興味深い。2013 年春 5 月にはとうとう仕事でお邪魔して館内を案内されたりもした。映画のシーンでお馴染みの大閲覧室も。その時は日本関係の担当者が休暇中でイタリア旅行中、代わりにウェブデザイン担当の女性が応対してくれた。こちらはお近づきの印として日本から箸や和紙などを持参してプレゼントした。日本のラーメンがブームらしく(ここ 2、3 年でラーメンも更に進化したらしくニューヨークのあちこちに店舗ができていくらしい)、話題は豚骨ラーメンの『一風堂』の話で盛り上がった。ラーメンにありつけるまで 2 時間待ちで too crazy と。一緒にお付き合い頂いた某書店ニューヨーク店のキューバ人を伴侶にした千葉県出身の女性スタッフと素晴らしい環境の事務室でしばし会話を楽しんだのだ。それも今となっては懐かしい思い出だ――。

さて、『ニューヨーク公共図書館』は、NYPL の略称で親しまれている、分館や研究図書館を含めて 92 館、予算規模 340 億円(日本の公共図書館の数は 3292 館、経常予算 1427 億円―日本の図書館総計 2018 より)、蔵書 5295 万冊、職員 3100 人余、年間来館者数 1700 万人、貸出数 346 万人(ウィキペディア)の巨大かつ民主的な図書館だ。そこにカメラが入った。ドキュメンタリー映画の巨匠フレデリック・ワイズマン監督の『ニューヨーク公共図書館 エクス・リプリス』である。午後 6 時 15 分開始、午後 9 時 50 分に終了の 3 時間 30 分の上映(途中 5 分の休憩)だった。

映画は図書館の科学者とのトークから始まる。やがてこれが民主主義だと言わんばかりの職員たちの熱い議論の場面が展開される。カメラは図書館の内部奥深く潜入していくが、基本はこの職員たちの熱い議論が全編を貫いている。公共図書館といっても中身は私立図書館でニューヨーク市の財政支援と残りは寄付で賄われているのが現状である。そこには財源確保に四苦八苦する図書館側の事情が見え隠れする。何にもまして企画立案がものをいうし、実現に向けて多種多様なプロジェクトを立ち上げ、分館や専門図書館を含めた巨大な図書館の運営が行政側にまた、寄付者側に対しても現実的に応えられているか、絶えず検証し続け結果を示している。でないと言いが削減され図書館運営に支障をきたすからだ。ニューヨーク公共図書館は、恐らく全ての点で世界中のライブラリアンが羨む、舌捲れる筆頭図書館なのだ。

それでは3時間余の上映の中身をパンフレットで追ってみよう。午後の本 Books at Noon)~リチャード・ドーキンス博士 司書たちの対応 民間支援者に語りかけるマーク館長 ジェローム・パーティー分館 著者と語る~イスラム教と奴隷性 舞台芸術図書館~ブルーノ・パーティーワルター講堂のピアノコンサート ブロンクス分館の就職フェア 幹部たちの会議 ピクチャー・コレクション ニューヨークのユダヤ2世について著者のトーク (公共図書館ライブ)~エルヴィス・コステロ 幹部たちの会議 (午後の本 Books at Noon)~ユーセフ・コマンヤーカ 中国系住民のためのパソコン講座 点字・録音本図書館 ミッドマンハッタン分館 ブロンクス分館の演奏会 黒人文化研究図書館~“ブラック・イマジネーション”展 舞台芸術図書館~マイルズ・ホッジス 幹部たちの会議 読書会 幹部たちの会議 舞台芸術図書館~劇場の手話通訳者 図書館の内側 パークチェスター分館 ジョージ・ブルース分館 シニアダンス教室 ウェストチェスター・スクエア分館 黒人文化研究図書館~90周年の祝賀会 読み聞かせ教室~マクナルドおじさんの歌 ハーグ・コレクション 幹部たちの会議 印刷コレクション 各分館スタッフとのミーティング 点字・録音本図書館 ジェファーソン・マーケット分館 (公共図書館ライブ)~バティ・スミス 施設担当の報告 幹部たちの会議 図書館ディナーの準備 委員会への報告~黒人文化研究図書館の蔵書について 幹部たちの記念撮影 (公共図書館ライブ)~タナハシ・コーツ 幹部たちの会議 マコーズ・ブルジ分館 (公共図書館ライブ)~エドモンド・デ・ワール 以上が上映内容である。

改めてこの映画から図書館の役割や奉仕(サービス)とは何かというごく当たり前の問いを突きつけられた思いだ。〈知〉の集積場所である図書館は、その本来の姿から進化した。高度な調査能力を持つ一現に映画では移民のルーツを訊ねてきた女性に懇切丁寧に応対している光景を映し出していた。ライブラリアン、地図コレクションや貴重書(グーテンベルクの聖書や作家カポーティの草稿ほか多数)の所蔵、映画のシーンでもお馴染みの大閲覧室(3階、ローズ・メイン・リーディング・ルーム)、オーディオ関係の貸出はもちろんのこと、作家らのトークショー、学習プログラム、音楽やダンス教室の開催そして今やネット接続用のツールまで貸出されている(インターネットのサポートには目を見張るものがある)。言わば、カルチャーセンターやコミュニティセンターとしての役割も担っているのだ。サラダポールのニューヨークの人口800万人のうち11%に相当する90万人が貧困層といわれているが、そういう人たちにも利用できるような工夫されている。身分証があれば原則無料だ。また、それぞれの地域に根差した地域館ともいべき分館の役割はそれを物語っていて、カメラも捉えて離さない。ブロンクスの就職フェア、チャイナタウンでのパソコン指導、黒人文化研究図書館の作家を招聘してのトークショー、舞台芸術図書館でのピアノ演奏、点字・録音本図書館の勇気ある試みなどカメラは執拗に本質を抉るように追う。筆者は特に作家らのトークショーや黒人文化研究図書館、それに職員幹部たちの会議のシーンが印象に残った。シビアな論戦のシーンも、この図書館を利用して作家や芸術家になった人たちもいるのも頷ける。知的好奇心を求める人たちには大いに開放されているのだ。1980年代後半にここを訪ねた際に分館も2、3訪ねている。それは寒いニューヨーク歩きに一体みできる安全な場所としてだったが、或いはある明治期に発行された新聞をあてもなく探していた時期だったが、今となっては定かではない。が、その新聞のありかをニューヨーク公共図書館で再チャレンジして探してみようと考えている。デジタル化が進んだ今、発見できるかも。それはともかくあつという間の3時間、迫力があつたしニューヨーク公共図書館の内部を垣間観れて大変興味深かった。昨夏北欧の公共図書館・大学図書館を訪ねた筆者なりの“リアルな図書館”の旅に新たな映画芸術の所産が加わった格好だ。何よりもここには生き生きとした人間が描かれている。リアリズム映画の極致と言ってもいい。平等と民主主義そして人間参加・讃歌――。

※辞書を引くと、エクス・リブリス Ex Libris は 蔵書からという意味のラテン語。英語は bookplate というらしい。日本では蔵書印。

【編集後記】

公共図書館向け新しい切り口の小冊子、「LIBRARY NOW」第2号をお届けします。ドキュメンタリー映画『ニューヨーク図書館 エクス・リブリス』を観ました。普段は公共図書館の内部を伺い知ることはできないのですが、この映画はライブラリアンが主役になって魅せてくれました。ともかく世界有数の図書館(私立図書館!)には民主主義と平等が息づいています。利用者に奉仕(サービス)すべくライブラリアンの活動が生き生きと描写されています。(k)

LIBRARY NOW 第2号
2019年10月25日発行
編集——(有)クロスカルチャー出版
LIBRARY NOW 編集委員会
〒101-0064 東京都千代田区神田猿楽町2-7-6
電話 03-5577-6707 ファクス 03-5577-6708
<http://crosscul.com>